

## カンキツ新品種 ‘南風’ の育成とその特性について

波多野洋・串間新一 (宮崎県総合農業試験場)

Hiroshi HATANO and Sin-ichi KUSHIMA : On the Breeding Process and the Characteristics of New Orange Cultivar ‘Nanpuu’

1972年頃よりウンシュウミカン生産過剰基調の基に、価格低迷がつづき、宮崎県のウンシュウミカンの価格は大きく崩れ、ウンシュウミカン以外のカンキツに転換する試みが始まった。宮崎県総合農業試験場果樹部ではウンシュウミカンに代わる温暖多雨地帯で栽培できるカンキツ品種の育成を目指し、1975年から交配育種試験を始めた。そして2,000以上の実生育成個体から有望個体の選抜を実施中であるが、その一部の成果として ‘南風’ を選抜し、1990年11月に品種登録した、その育成経過と特性の概要を報告する。

### 1. 育成経過

1979年に清見を母体にフェアチャイルドの花粉を交配 (100花) して、34個の果実から約600粒の種子を得た。この種子を消毒した土の平鉢に播種し500個体の実生苗を得た。この幼苗を冬季最低温度12℃に設定したガラス温室内でポリポットに植付け生育に応じてポリポットの大きさは8号より18号まで漸次大きくして高接ぎの穂木が採取できる苗木に育成した。この実生苗の枝を1982年4月に普通温州15年生樹を中間台として高接ぎを行った。接木本数は腹接で1樹当たり10個体を接いだ。高接ぎ初年目に液肥の葉面散布を10回程度行うなどの綿密な管理を行い、2.5m以上に伸長させ、翌年これに4又状の支柱を鉄パイプで組み、結束し、枝の先端を誘引して引き下げ開花促進を図った。1984年から開花結実を始めたので、果実特性及び個体選抜を開始した。この中で一応育種目標に近い数個体を選び、調査を繰り返すとともに、最も有望な79-397の個体を県内数か所に高接ぎ栽培を依頼して果実特性を調べ南風を選抜した。

### 2. 特性の概要

樹性：樹勢は中程度で樹姿はやや立性である。枝梢は密生しやや細い。葉面積は22cm<sup>2</sup>位で葉身の先端は細く鋭くなっている。翼葉の大きさは中程度である。未着果の枝梢は良く伸長するが群状着果させると、翌春の枝梢の

発生は少なくなる。花は総状花序につくが有葉単生花も良く発生する。単為結果性はないが自家受精する。結実性は普通である。

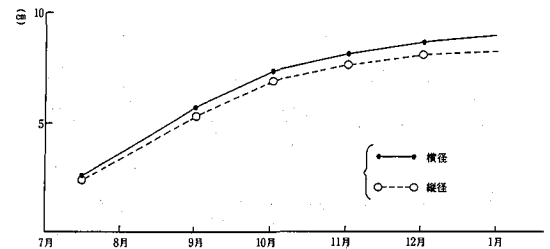
果実：果実の大きさは200g内外で果形は球形、果形指数は105~110程度である。果皮色は濃橙色で果面は平滑で極めて美しい。果頂部に臍ができるがネーブルオレンジのような大きい臍ではない。剥皮性はやや良く手で剥げる。砂じょうは密で軟らかい、じょうのう膜が極めて薄く、袋ごと食べられ、うすいオレンジ香があり食味は良好である。種子数10粒前後で果心部に集まっている。胚は白色で単胚が多いが、多胚も見られる。果皮の着色は11月上旬より始まり、12月上旬には完全着色となる。袋掛けをして樹上越冬させると鮮やかな濃橙色になる。果汁中の糖含量は12月中旬で11%、1月中旬で12%であるが糖の高いものでは13%を上回るものもある。クエン酸含有量は12月中旬に1.2%であるが、1月中旬まで樹上におくと1%程度となる。貯蔵中の障害は少ない。

### 3. 栽培上の特記事項

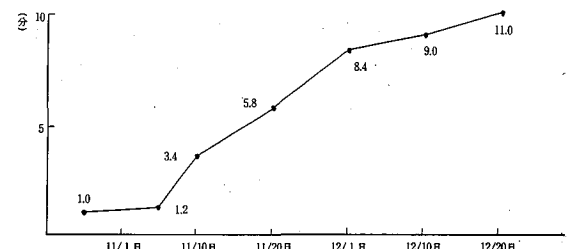
樹勢を強く保つため、土壌改良として深耕及び有機物の施用を行い、根群域を深くする。

かいよう病にやや弱いので、強風の当たらないところを選び、防風対策、薬剤防除を十分に行う。

9~10月に後期裂果があるので摘果はやや軽く行う。夏秋期に高温乾燥が続く場合は、土壌水分の急激な変化を避けるために適宜かん水を行う。



第1図 南風の果実肥大状況



第2図 南風の果実着色状況

第1表 南風の果実特性

項目	特性	項目	特性	項目	特性
果実重	200g内外	胚色	白色	アルベド	白色
果形指数	105	胚数	単	香氣	弱オレンジ
果皮厚	2.3mm	無核果率	0%	果肉色	橙色
糖度	12%	果形	球形	果肉質	密軟
クエン酸	1.20%	果実硬軟	やや軟	じょうのう	軟
種子数	10粒	果皮色	濃橙色	苦味	ナシ
剥皮性	やや易	果皮粗滑	滑	食味	良